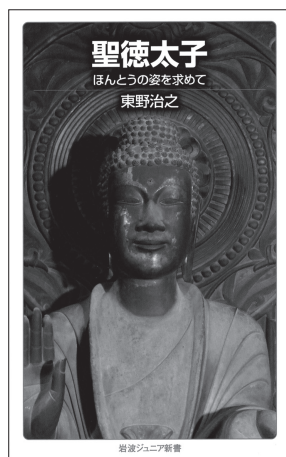


東野 治之 著

聖徳太子

——ほんとうの姿を求めて

紹介者 三谷 芳幸



岩波書店

2017年4月刊

新書判

238ページ

本体 960円

目次

はじめに——この本を読む人へ

序 章 ほんとうの聖徳太子を求めて

第一章 釈迦三尊像の銘文にみる太子

第二章 太子はどんな政治をしたのか

第三章 聖徳太子の仏教理解

第四章 斑鳩宮と法隆寺

終 章 聖徳太子の変貌

あとがき

「聖徳太子はいなかった」というフレーズがメディアを賑わしたことがある。いうまでもないが、本書で展開される聖徳太子論は、そのような煽情的な惹句とは無縁なものである。

著者は、聖徳太子に関するすべてを疑い、何から何まで否定する、という姿勢に反対する。まずは疑うことのできない確実な「定点」を見つけ、そこから丹念に太子の実像を復原していく、という手法をとる。

重要な「定点」とされるのは、法隆寺金堂釈迦三尊像の光背銘文である。のちの時代の刻銘とする説もあるが、著者は実物の克明な観察によって、これを太子の没時に刻まれたもっとも信頼できる同時代史料と判定する。そして、太子は銘文中で確かに「法皇」と呼ばれており、並はずれて仏教への造詣が深かったことは疑いない、と指摘する。モノの実見調査による新たな発見と、銘文を読み解く推論の周到さが、著者の議論を支えている。

つぎに、この「定点」をふまえ、用心深く真偽を確かめながら、『日本書紀』『上宮聖徳法王帝説』などの太子の伝記史料を読み込んでいく。

太子は、ミコノミコト(皇子命)という、皇位を継承しうる特別な立場にあり、ある程度の政治的主導権を発揮していた。十七条憲法も、史上稀にみる仏教尊重の時代であった飛鳥時代にふさわしい内容で、太子が作成に関わったとみて差し支えない。ただし、蘇我系の血統にある太子は、はるかに年長の蘇我馬子からみれば、蘇我氏の持ち駒の1つというべき存在であり、権力による政策の実行という点では、馬子の実力に負う部分が大きかった。馬子と太子の共同統治といわれる推古朝の政治の実態を、著者はこのように解きほぐしていく。

法華義疏については、現物の観察にもよりながら、太子本人の著作で、その自筆原稿とみるのが妥当であると述べ、これを含む三経義疏には、その後の日本仏教を特徴づける諸要素がすでにみられるとする。そして、太子は突出した才能と個性をもつ「過激な知識人」であり、その本領は、馬子の推進する政治・外交のブレーンとして、中国の学問と仏教をふまえた政策を立案・提言することにあつた、と結論するのである。本書を読む醍醐味は、この結論に至るまでの緻密な論証のプロセスを、著者に導かれながら追体験することにあるだろう。

著者がすすめる吉村武彦『聖徳太子』(岩波新書、2002年)とともに、本書は聖徳太子への最良の案内書の1つといえる。(みに・よしゆき／筑波大学人文社会系教授)